

# 樹 守

—日本樹木医会北海道支部会報—

1994年1月20日 発行  
(平成6年) NO. 3

事務局 ☎060 北海道札幌市中央区北3条西6丁目  
北海道林務部森林整備課内

☎011 (231) 4111 内31-278  
発行人 中内武五朗 [美唄市西4条北3丁目6-26]  
編集人 館 和夫

随 想

## 翠 ふるさととの原風景 翠

館 和 夫

### 炉辺の思い出

檜山の中山峠に連なる山々を縫うように流れる鶺鴒川が漸く平野に出てゆっくりと方向を変えようとするあたりに、木間内という小さな村落がある。その村外れにある橋のほとりに、ダイマルという屋号で知られた私の家があった。明治時代の末頃まで旅籠（はたご）をしていたというわが家は、茅葺き屋根に白壁造りのどっしりとした感じの家で、真向いには遠成寺という、これまた大きな茅葺き屋根をもつ鄙びたたずまいの寺があり、幼馴染みの餓鬼大將が住んでいた。家のそばには古い池があり、何本もの太いスギや、カエデ、イチイの木などが、昼なお暗いといった感じで生い茂っていた。裏山には能登生まれの祖母が内職にしていた糺つくりのためのムロがあり、子供が近づくことは禁じられていたため、蔦のからまる雑木に覆われたその崖山の一角は、私にとってはかえって神秘的な妖しい魅力をもつ場所のように思われた。



半世紀前の木間内あたりは、まだまだ全近代的なランプ生活で、幼い子供達は必ずといってよいほどランプのホヤ磨きをさせられた。その頃の子供の遊びといえば、定番の鬼ごっこ、隠れんぼのほか、兎狩り、蛭狩り、蛇退治など、甚だ田舎くさい粗野な遊びで、私も兄弟や寺の息子達と共に、それらを一通り体験させてもらった。遊びつかれて帰ってくると、囲炉裏にはあかあかとした焚火が燃えており、祖母がその中でイモやクリ、煎餅などを焼いてくれるのを、兄弟が競いあって食べたものである。

あるとき、どう気が向いたものか兄と二人で禁断の裏山の崖に上って散々に遊んで帰ってきたまではよかったが、夕食後、一同が炉端に集まったとき、ちょっとした事件が起こった。いつの間にやらダニが一匹、私の目の中に入り込んでいたのを、祖母が見つけて大騒ぎになったのである。田舎家にピンセットやガーゼのようなものがあるはずもなく、あわてて指を突っ込んでつまみ出したらしいが、そのときの痛さは、何十年経った今も忘れられない。

## 海辺の町で

さて、5、6才になった頃、家庭の都合で江差の町に出て、鷗島に近い海岸の家に住むようになった。見慣れた木立に代わって裏山はイタドリの藪一色。母屋で囲まれた狭い庭には、ひょろりとした丈の高いシクナゲが1株立っているのみである。加えて朝夕きこえてくるものは潮騒の音ばかり。

そういった生活環境の激変は、幼心のどこかに影響を及ぼしたらしく、私はその後、よく近くの姥神大神宮の境内に出掛けては暗い木立ちの中で苔の標本を集めたりして遊んだ。ときには遠く豊部内の沢の奥まで出掛けては、セミをとったり、小学校の陰にある鳶屋の沢にクリを拾いに行くこともあった。学校の行き帰りには神社のそばの平野旅館の前にある根元のまがったカエデの木にちょっと腰を掛けたり、堀井さんという大きなお屋敷の前のヤマツツジの花を失敬しては、そのホロ酸っぱい味を楽しんだりした。

いつの時代でも、どんな環境のもとでも子供というものは、何らかのかたちで木に親しみ、その印象を心の中にしっかりと刻みつけるものらしい。

## 日頃の希い

ところで、北海名物のひとつである江差追分の古い文句の中に

花の松前 紅葉の江差 開く函館桔梗の花

という一句があるのをご存じであろうか。「花の松前」は天下に知られているが、函館市桔梗町あたりにかけて見渡す限り自生していたという桔梗は絶滅して久しい。江差の紅葉は単なる添え言葉とも思えないが、唄に唄われるに足らずは少なすぎる。そこで江差地方に、なんとかしてモミジ類（ヤマモミジやイロハモミジ、ハウチワカエデ、風のつよいところではイタヤカエデなど）を増やして、上記の唄の文句に背かないようにしようではないか、というのが私の日頃からの提案であり念願でもある。さらに檜山の名のもとになったヒバ（ヒノキアスナロ）が、それらの紅葉の中に混じっていれば、それこそ最高である。

そしてこのような事業の必要性は、決してひとり檜山地方にとどまるものではない。

現在、道庁では「一人一木植栽運動」という運動を繰り広げている。幸いにしてこの運動が功を奏し、道民の皆さんの理解と協力によって苗木の入手難、用地難など、いくつかの隘路が克服され、地域の景観を豊かにする特徴ある木々が、道内の各地方を彩る日が一日も早く来るよう、林務関係者の一人として心から希わずにはおられない。

(北海道林務部森林整備課・樹木医)

この一本がみどりの大地の主役です。

一人一本植樹運動





鈴木 順 策

### はじめに

事務局から原稿の依頼があったが、事例発表は今後の樹木医としての活動結果を踏まえ、先輩樹木医諸氏のご指導を仰ぎながら発表する機会があらうかと思うので、今回は思いつくままに・・・と題して、自由奔放に筆をとらせていただくこととした。

### 樹木医制度のこと

樹木医制度については、平成3年度の林野庁業務方針の中で、新たに「ふるさとの樹木保全対策事業」を発足させ、樹木医の養成制度をスタートさせると言うことは知っていた。

その当時は「樹木医」に憧れたものの「樹木医」に求められる資質と役割は高レベルのものであり、小生にとっては北見営林支局を最後に退官する時と重なって、ほど遠い存在だったと記憶している。

しかし、役人時代は、どちらかと言えばオホーツク海岸沿線の海岸防災林造成（砂地・重粘土地・泥炭地）・斜網を中心とした防風林造成・渚滑平を中心とした保安林改良等森林のもつ公益的機能の分野の仕事が多く、特に気象害や土壌障害、病害には大変苦勞したが、当時の北大・東三郎教授のご指導もあって貴重な経験（試行錯誤の結果今は夫々立派な森が造成されている）と、ボランティアによる樹木の樹勢回復等も合わせて実務経験は十分クリアしており、心の底ではいつかは挑戦してみたいと思っていた。

### 樹木医初挑戦の失敗をバネにして

55歳で山官を卒業し、北見地方の林業関係の団体職員として勤務したため、その年には日本林業技術協会の林業技士（林業経営）の資格を取得し、やれやれと思いつつ職務の関係から、高性能林業機械（ハーベスタ・クローラフォワード等）の作業システム確立のため、管内の山で現地調査員などの仕事をしてきた。

そんなある日、北見営林支局のある幹部から「樹木医」に挑戦してみてもどうか！との話があり、能力の限界も顧みず、心の準備もそこそこに平成4年度の樹木医研修受講資格審査に応募した。

結果は、見事に「不合格」となった。

当時、北見市の「緑と花の市民の会」の企画委員会で、林業技術者の立場からアドバイザー（現在：企画委員）として参画していた関係上、樹木の保存や市民の森造成等の技術をアドバイスする立場にあった。

不合格となった者が「樹木の保存」等についてのアドバイザーとは、実に惜げないと再度不合格をバネに奮起し、なんとか平成5年度の樹木医研修生に選抜された。

しかし、念願の「樹木医の卵」となったものの、藪医者への範疇からいつ脱出できるかが、今後課せられた小生にとっての大きな課題でもある。

## 樹木医としての心構え

地球的規模での熱帯林の減少・地球温暖化・酸性雨等の広域的大気汚染などが樹木を衰退させ、消滅の危機にさらされている時代と相俟って「北海道の巨樹・名木」をはじめ、各市町村条例に基づく由緒ある保存樹木や、神社仏閣、公園等の樹木もその例外ではなく、かなり衰弱して治療を必要とするものが多く見受けられると聞く。

当地方においても、エゾヤマザクラの胴枯病とコスカシバによる被害、トドマツ・ドイツトーヒに見られる溝腐病（病原腐朽菌モミサルノコシカケ）の被害、更にはカシワ、イチイの腐朽など末期的症状で放置された樹木も多い。

このような実態下において、わが国ではじめての樹木医制度によって従来からの古典的技法から教わる「桜切る馬鹿」「梅切らぬ馬鹿」等の時代的変遷を経て、樹木医学としての幅広い知識を駆使した科学的治療技術の取組みが始まった。

それだけに臨床樹木医学としての樹木医に課せられた使命は大きく、責任の重大さを感じ常に研鑽を高め、診断治療には技術の及ぶ限り対処しなければならないと考える。

## 樹木医としての社会的地位の確立

樹木医制度発足以来3年有余とまだ日が浅いが、樹木医を専業としていくための生活基盤の確立等、身分保障的な諸問題が山積しているものと思われる。

いづれこれらの諸問題は、日本樹木医会を中心に時間的空間の中で、やがては解決されていかなければならない問題ではあるが、関係省庁、地方公共団体等の強力なバックアップがなければ、不本意ではあるが他の職務を主とした樹木の診断治療活動に終始し、ややもすれば「樹木医の存在価値」を問われることが危惧される。

従って、そのことを十分踏まえた上での樹木医たる行動が肝要であろう。

## おわりに

幸にも山官として、管内国有林で資源調査等以外にはめつたに行くことができない奥地での、鬱蒼たる天然生林（針広混交林）を見てきた。

この中にも大径で神秘的な、その流域の「山の主」とも言うべき樹木に出会うことがある。

里山や、住空間にある樹木とは生育立地が異なり、素晴らしい樹形と樹皮・葉の色が鮮やかなこのような樹木も、伝承、信仰の対象等と同様に、保護木として扱いたいものである。

そして、願わくば北の大地・北海道の全支庁管内に樹木医が配置され、会報「樹守」を通じて「木に樹木医あり」の時代を構築し、日本樹木医会北海道支部の先輩諸氏と共にその歴史を刻みたいものである。

（北林測量株式会社・樹木医）

橋場 一行

千古園の概要

野幌駅前から南へ2.7 kmほど隔たったなだらかな丘陵地の一角（東野幌375番地）に、明治24年、はじめてこの地で開拓の跡を振るった北越植民社代表の故関谷孫左衛門翁の旧居跡（千古園、江別市指定文化財・昭和31年6月風致公園に指定）がある。

園内にはエゾヤマザクラ、ヤマモミジ、ハルニレ、キタコブシ、ミズナラ、カシワ、ブナなどの古木が散在し、静かな田園の風情を保っているが、中には腐朽や衰弱がかなり進んだものもある。

平成4年7月、それらの樹勢の診断を市役所から依頼され、調査した結果、中で最も腐朽・衰退の著しいキタコブシが治療の対象としてとりあげられることになった。以下、その際に指導した樹体の補修、並びに樹勢回復処置について、参考になりそうな事柄を記してみたい。

治療木の原状

治療対象木は、園内の南側に位置する樹齢170年以上と推定されるキタコブシで、樹高12 m、樹幹の太さ32 cm、樹冠幅約10 mである。北側および北東側の樹幹は、地上8 mから上は腐朽が進んで空洞になっており、南側にのみ太い枝が発達して、いわゆる偏奇樹冠をなしている（図参照）。

樹幹の高い部分の空洞、および辺材部分は主として白色腐朽菌による腐朽が進行中で、その範囲はしだいに拡大する傾向にある。また、根元は踏圧により土壌構造が堅密化しており、対策が必要になっている。

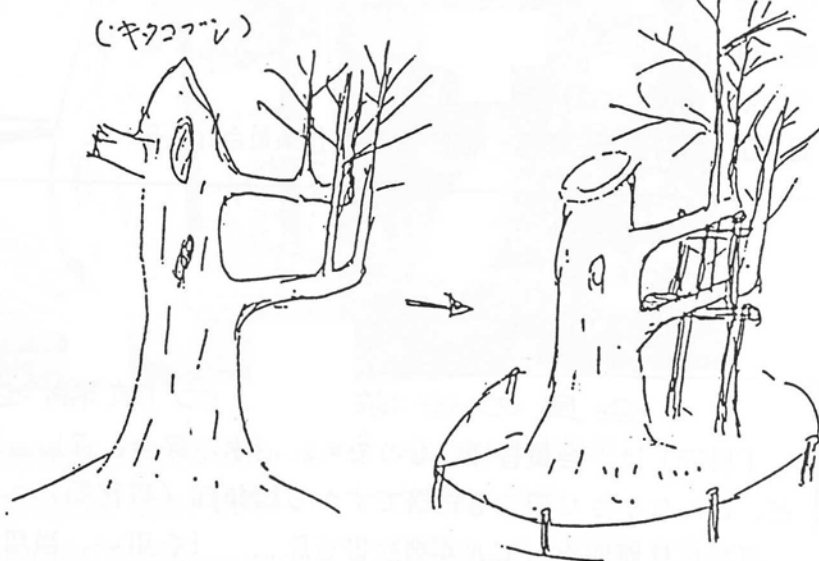


図-1 千古園のキタコブシの現況 図-1 施工前のキタコブシ 図-2 施工後のキタコブシ

### 樹勢回復・補修処置の概略

樹体のバランスを保ち、風・雪害による枝の折損を防ぐため、南側の枝に支柱（枝の直径の半ば程度の太さの撞木状の支柱）を施した。また、腐朽の進行を阻止するため、雨水が流れ込まないように幹の上部に位置する空洞の腐朽部分を除去・殺菌したのち、第一枝階の部分まで充填物（発泡ウレタン等）を詰め、銅板で蓋をした。さらに踏圧の害を除くため、根元のまわりを耕起し、杭状に加工された化学肥料を施した。

実際の施工は、札幌市西区内に本社をおくS社が行ったが、施工に際して同社は高所作業が多いため、作業員の安全の確保には特に留意した。

これまでのところ工事後の風雪害や、いたずらによる被害もなく、対象木は順調に生育している。なお、治療に要した資材および人工数の概略は、別表の通りである。

江別市千古園の名木キタコブシの補修に要した資材並びに人工数の内訳

資材名または人工数	仕 様	数量	単位	摘 要
防菌殺菌用塗布剤	1 缶1kg 入り	7	缶	トップジンMペースト使用
発泡ウレタン	1 缶750 ml入り	18	本	合計13.5ℓ, 発泡後容積約200 ℓ
発泡スチロール	サイズ 0.06m/0.9m/1.8m	3	枚	合計0.29㎡
東邦パーライト	1 袋0.06㎡入り	6	袋	不整形部、および根元部分充填用
足場丸太	長さ6m	24	本	
支 柱	焼き丸太	4	本	
肥 料	グリーンバール	20	本	
その他、銅板、ポリパテ若干量				
足場工・外科手術・耕起・施肥・運搬等作業員合計		8	人	

(北海道立林業試験場・樹木医)

### 会員の皆様からの原稿を募ります！

「樹守」は、会員皆様のもので、樹木の保全、保護管理にかんする話題や研究成果など、どんな小さな事でも結構ですから編集部（事務局）へお寄せ下さい。

原稿には原則としてA4判横書き原稿用紙を用い、当用漢字・楷書書き。ワープロ原稿はA4判・1ページ当り38列、1行当り40字にまとめて下されば助かります。なお、編集の都合上、長さや表現を適宜補整することがありますが、ご了承下さい。

# アカマツ外科手術の一例

斎藤 品

## 大和静観園の沿革

このたび治療を行ったアカマツが生立している場所は、函館市に隣接する七飯町大川地区に位置する大和静観園である。この公園は、明治から昭和の初期にかけてニシン漁業が隆盛だった頃、当時の網元が約5haの土地に巨費を投じて別荘と豊漁祈願のための神社を建て、同時に道内外から数多くの名木や名石を集め、本州から庭師を招いて庭園を造成したことに始まる。その後、幾度か所有者は代わったが、美しい庭園のたたずまいは変わらず、貴重な地域の緑地公園として現在に至っている。

## 治療木の概要

治療木は、移植後約140年経過したと推定されるアカマツで樹高5m、樹冠の幅12m、根株から三ッ又に分岐した各幹の直径は45～50cmである。樹形は各枝条とも下垂した懸崖状で大きな円い杯状を呈している。外観的な被害状況を見ると、各幹とも南西面の縦方向に腐朽菌と穿孔性害虫に侵された痕跡があり、幹の太さと比較した腐朽部分内部の比率（腐朽率）は40～50%で、かなり広い範囲まで腐朽が進行していた（写真-1）。

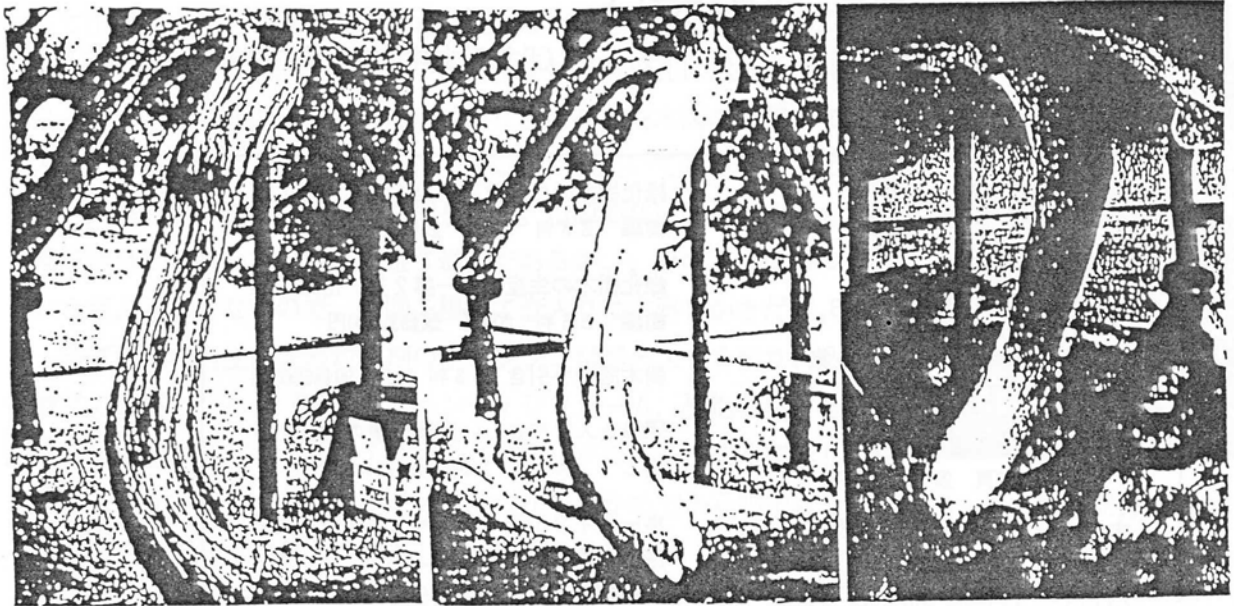


写真-1 木材腐朽病及び穿孔性害虫による被害の状況

写真-2 患部の消毒及び補強の状況（腐朽部の除去、消毒、鉄筋金網の取付けまで完了）

写真-3 モルタルの充填が完了した状態（金網の上から幹周に合せモルタルを被せ終った状態）

## 診断結果および器具機材

腐朽部分の除去と治療に用いた器材は、鋸、鉋、金鋸、丁斧（ちょうな）、のみ、ドリル、パールなどの大工道具のほか、電動器具ではグラインダー、掃除機、高圧水力ポンプ、噴霧器、補強・充填資材として支柱、鉄筋、金網、モルタルなどを用いた。また、防菌および生育促進のため、ダイセンやトップジン水和剤を用いたほか点滴式グリーンセット（成長活力促進剤の二価鉄イオン安定液を樹冠に注入するための器材）を使用した。

## 外科手術の方法

まず、幹の各部位から抽出した木片のコアから辺材部の強度を見定め、枝葉の強度が集中する一に支柱を設定した。次に鉋、のみ、丁斧、グラインダーなどを用いて腐朽部分を完全に除去すると共に、微細な木屑等は掃除機で吸引し、さらに高圧水力ポンプのジェット噴流で空洞溝の内部を清掃した。腐朽部分を除去した後は、空洞溝の壁面に殺菌・防菌剤であるダイセン水和剤の500倍液を散布し、トップジンMペーストを塗布した。

また、治療木の辺材部を補強するため、空洞溝の低部に沿って亜鉛引きの鉄筋とモルタルの充填を容易にするための金網を取り付け（写真-2）、その上に配合比1対2の割合で調整したモルタルを金網の上から空洞溝の全体に充填し、表面は左官鍍（こて）を用いて幹周に沿って均一に仕上げ、硬化後は薬で幹巻きを行った（写真-3）。

外科手術後は樹勢が衰弱するため、点滴式注入用器材により活力促進剤を樹幹内に補給し、樹勢回復を図るなどの内科的処置を併せ行って治療を完了した。

（北海道立林業試験場道南支場・樹木医）

## 出版物一覧

### 緑化地の土壌改良

B 5 判 140頁 頒価2,060円

### みどりとつきあうエチケット集

A 5 判 36頁 頒価258円

### 改訂版・人とみどり

A 5 判 127頁 頒価1,000円

### 木を植えよう・20周年記念出版

A 5 判 64頁 頒価550円

### ガーデンパークガイドライン（案）

A 4 判 103頁 頒価2,500円

### 第19次（平成3年）緑化樹木の生産状況調査報告書

A 4 判 95頁 頒価3,000円

### 海外緑化研究機関の動向調査報告書

A 4 判 145頁 頒価5,000円

### 平成4年度、供給可能量・調達難易度調査報告書

A 4 判 221頁 頒価2,000円

### 再版松枯れの防除と対策—松の生理・生態と材線虫病

A 5 判 268頁 頒価2,200円

### 緑化樹木の生産技術—第1集・常緑広葉樹編

B 5 判 200頁 頒価3,000円

### 緑化樹木の生産技術—第2集・落葉広葉樹編

B 5 判 200頁 頒価3,000円

### 樹木医の手引き

B 5 判 336頁 頒価5000円

### 環境と人にやさしい産業環境の創造を目指して

A 4 判 120頁 頒価4,500円

### ホーティカルチュラル・セラピー（園芸療法）現状調査報告書

A 4 判 150頁 頒価5,000円

### 能と森のはなし 筒井迪夫著

四六判 245頁 頒価1,500円

### ホーティカルチュラル・セラピー、実践のための庭づくり。

B 4 判 110頁 頒価6,000円

### ■申込先・財団法人日本緑化センター

〒107 東京都港区赤坂1-9-13

三会堂ビル TEL (03) 3585-3561(代)

FAX (03) 3582-7714



館 和 夫



写真-1 幌南小学校のシンジュ

### いとぐち

昨年の8月上旬、札幌市の幌南小学校から電話が  
あって、校庭に立っている2本のシンジュの木のうち、  
一方の太い枝に孔が開いており、腐れが心配なので診て  
ほしいと依頼された。その日の昼路に立ち寄って用意さ  
れた梯子を上って見ると、なるほど地上7、8mもある  
高い枝の節になったところに開口部があり、底の方に細  
かい鋸屑状の木屑が詰まっていた。小さなアリが出入りし  
ていた。

その日は道具を持っていなかったのでものを改めて、学  
校のシンボルになっているその木の外科手術を行うこと  
にした。

### 作業内容

8月31日、作業衣に身を固め、厚布製の大きな袋に工具、充填  
剤、測定器具、カメラ、筆記具等を詰め込んだ上、外勤命令をもら  
って出掛けた。手を掛けてみると、最初みたときの印象とはだいぶ  
異なっていて、開口部は小さく狭いが幹に連なる枝の孔は意外に深い。  
さっそく切開（写真-1）して盛岡市在住の神山樹木医の発明にな  
る大小の腐朽木カッター（実用新案出願中）を用いて木屑をかきだ  
し、内壁の黒く変色した部分を削り取る。電源のない野外で使える  
掃除機はこのような場合、貴重な道具であるが、そのようなもの  
はまだ入手してないので、時間を掛けて念入りに木屑をかきだす。

つぎに孔の内壁に保護殺菌剤のトップジンMペーストを塗り、2  
液式の硬質ウレタン（商品名：ハンディUフォーム、発泡器具付き）  
を用いて空洞を充填する。1度目はB液の出が悪く、うまく整形し  
なかったが、セットを取り替えてB液の出を確かめてから噴出させ  
ると、2度目はよい具合に整形した（写真-2）。

薬剤の量を節約するため、途中ではみだした部分や、下に落ちたり周囲に付着したウレタンなども  
まだ固まりきらないうちに回収して充填した。なお、空洞が広く、硬質ウレタンを増量する必要があ  
る場合は、魚箱などの包装資材として広く用いられている発泡スチロールの切れ端などを用いることも  
可能であろう。

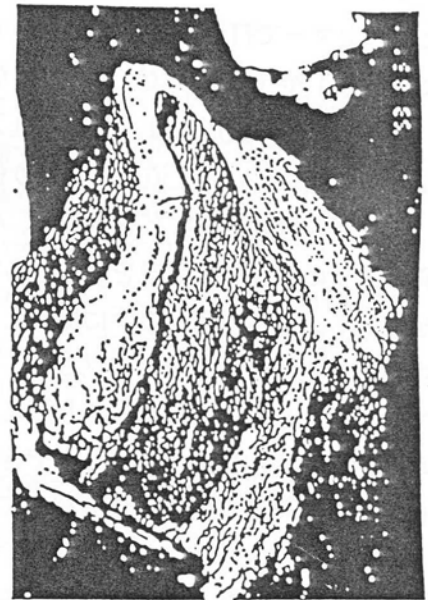


写真-2 腐朽部分の開口部  
（切開したところ）

最後にウッドパテという名称で市販されている木工用パテで表面処理を行ったが、その色は明るいセピア色で、くろずんだシンジュの樹皮の色とはマッチしないように思われたため、最後に木工用パテの表面に墨汁を塗りこんで仕上げた（写真-3参照）。ウッドパテの表層と混じり合った墨汁は、雨水で簡単に流れ去るようなことはなく、長期にわたって褪色しない層状の塗膜となって推移するものと思われる。

#### 気のついたこと

作業衣や手袋は、当然ながら大いに汚れるので、それに相応しい服装が必要である。私は着古したフード付きの薄い化繊のウインドブレーカーを着て作業したが、なかなか具合がよかった。

作業用具として、大小の金挺（かなてこ）で先に刃が付いたもの（出来れば先がスプーン状になって腐朽部分の切削に使えるもの）があればよいと思った。かなてこは丈夫なので、あおりが利くこと、ハンマーで打込めることが強みである。その昔臼掘りに使われた臼掘り丁斧（ちょうな）があればなお結構である。

細かな部分の整形には、広幅の丸ノミなど各種のノミや銚（せん）など、昔懐かしい大工道具がやはり便利なようである。

テレビの自然番組などを見ると、小さな動物や昆虫の巣穴に細い胃カメラのような撮影機を突っ込んで、自在に中の状況を映して見せている。むろん個人の手には負えない高価なものなので普通の懐中電灯で空洞の中を覗いて見るが、狭い空洞の中などはぼんやりしていて肝心なところははっきり見えない。そこでアウトドア用品の専門店から自由に曲げ伸ばしができる電線の先端に、小さな電球が付いている特殊な懐中電灯を買ってきて現在、重宝に使っている。

#### おわりに

ともあれ、場数を踏んでいろいろなことを体験する中で、内容を高めて行くより仕方がない。

幌南小学校の諸先生のお礼の言葉を聞きながら、このように喜んでくださる人々のために、また、何より長年の風雪に耐えてそこに生えている木々のために、今後とも樹体修復や樹勢回復に関する技術知識を磨いていかなければならないと、決意を新たにしたいである。

（北海道林務部森林整備課）

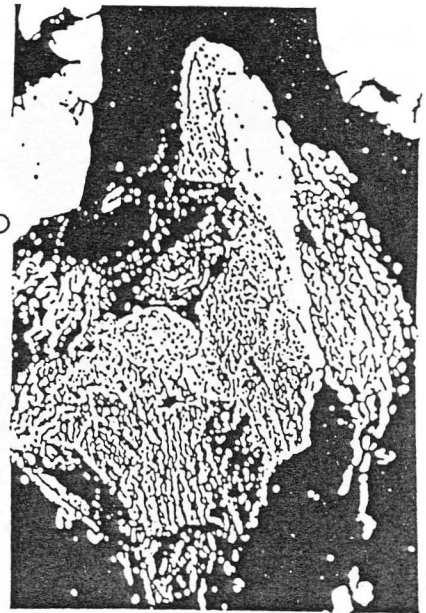


写真-2 硬質ウレタンを  
充填したところ

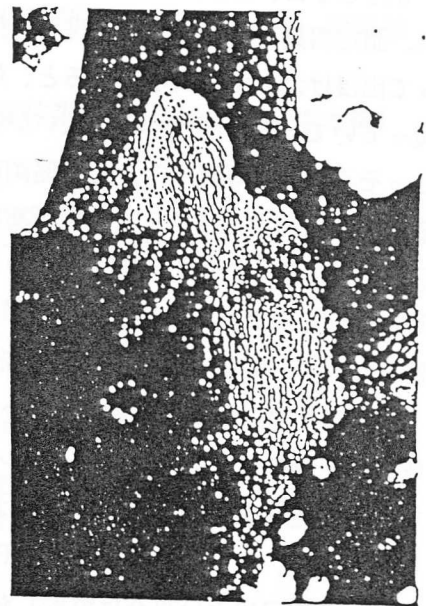


写真-3 木工パテ、墨汁を  
塗って完了

— 樹木医認定制度・刊行物等についてのお問い合わせは下記へどうぞ —

財団法人 日本緑イヒセンター

〒107 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル

TEL 03 (3585) 3561 FAX 03 (3582) 7714

お知らせ

## ！ 道内に新しい樹木医 2 名誕生 ！

昨年11月25日、平成5年度の樹木医（第三期生）合格者78名の発表があり、道内から新たに下記の2名の方々が（財）日本緑化センターから樹木医として認定された。会員の皆様ともども、心からお祝いを申し上げます。お2人にはさっそく正会員として本会に加入していただいたが、つぎに五十音順にそのプロフィールを紹介することとしたい。

◎鈴木順策さん



道内初の営林局畑出身の樹木医。札幌市出身だが、幼時を林業の町として知られる丸瀬布町で過ごしたという58才。昭和29年の遠軽営林署勤務を皮切りに、昨年4月、北見営林支局勤務を最後に退職するまで、治山関係の仕事に永くたずさわり、自然力豊かな山々を尋ね歩いてはそれらの名木美木の保護の必要性を痛感したという。根っからの木好きで盆栽にも造詣が深く、日本園芸協会認定盆栽士の資格も持っている。

平成5年7月から北見市内の北林測量株式会社に勤務、目下樹木医としてエンジン始動中。

◎橋場一行さん



昭和11年、松前町生れ。道職員となって桧山、釧路などの各支庁を回った後、平成4年から北海道立林業試験場に勤務する林業専門技術員の束ね役である総括林業専門技術員を勤めている。仕事熱心で、専門項目に拘らない広い視野を持っているのは、役柄のせいとばかりいえない天性の人柄というものであろう。生来の樹木好きで、常に樹木園や畑の見回りを欠かさない。春になると寸暇をさいていろいろな木の挿し木を試みたり、苗木の手入れをしたり余念ないが、今後、樹木医としても存分の活躍が期待される。

なお、認定制度発足以来の樹木医の累計は234名であるが、不幸にしてこの3年間に物故した人が3名おり、平成6年1月現在、樹木医の在籍数は231名（うち台湾1名）である。

現在の在籍者の都道府県別内訳は下記の通り。

北海道（6）、青森（7）、岩手（3）、宮城（5）、秋田（5）、山形（6）、福島（5）、茨城（8）、栃木（8）、群馬（3）、埼玉（4）、千葉（5）、東京（18）、神奈川（7）、新潟（5）、富山（5）、石川（4）、福井（3）、山梨（6）、長野（4）、岐阜（6）、静岡（6）、愛知（7）、三重（5）、滋賀（3）、京都（8）、大阪（8）、兵庫（7）、奈良（3）、和歌山（2）、鳥取（3）、鳥根（1）、岡山（5）、広島（5）、山口（2）、徳島（5）、香川（2）、愛媛（3）、高知（2）、福岡（5）、佐賀（2）、長崎（2）、熊本（6）、大分（5）、宮崎（4）、鹿児島（5）、沖縄（1）、国外〔台湾〕（1）

## 樹木医講演会のご案内

来る2月17日、日本緑化センター主催の平成5年度樹木医講演会「樹の生命を守る一が、下記の要領で開かれます。お繰合わせの上、ふるってご参加ください。

- 主 催 (財)日本緑化センター ■入場無料  
協 賛 日本樹木医会  
協 力 北海道 ■申込期限 平成6年2月10日(木)  
後 援 林野庁

- 開催日時 平成6年2月17日(木) 13時～16時45分  
場 所 ポールスター札幌 2階「コンチェルト」  
〒060 札幌市中央区北4条西6丁目 TEL 011-241-9111

### ■スケジュール

- 12:30 受付開始  
13:00 開会  
13:00～13:20 挨拶 財団法人日本緑化センター  
北海道林務部長 小野寺宗昭  
13:20～13:30 平成5年度樹木医認定登録証授与式  
13:30～14:30 腐朽木の診断と治療  
講師 中内武五郎(樹木医, 北海道植物美術病院)  
14:30～14:45 休憩  
14:45～15:45 病害虫の診断と防除  
講師 館和夫(樹木医, 北海道林務部森林整備課)  
16:45～16:45 弘前公園の桜の管理  
講師 小林範士(樹木医, 弘前市役所商工部公園緑地課)  
16:45 閉会

- 参加申込: (財)日本緑化センター 樹木医制度事務局  
〒107 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル  
TEL 03-3585-3561, FAX 03-3582-7714

北海道林務部みどり対策室緑化指導係  
〒060 札幌市中央区北3条西6丁目  
TEL 011-231-4111(内線31514, 31515) FAX 011-251-3879(代)

### 編集後記



あっというまに1年が経ち、年が明けた。ひきつづき「2月逃げる、3月去る」と、古人の諺にあるように、すばやく月日は過ぎ去って行く。

うつろいやすい月日ではあるが、好むとこのまざるにかかわらず、それと上手につきあって行かなければならないのが人生である。西洋のさる哲人が言ったように、「道程がすべてであり、終局は皆無である」かもしれないが、面倒な理屈はわきにおいて、ともかくも仕事と家庭を守るため、一年を通して頑張りぬくのがわれわれ日本人である。

緑の守り手である会員の皆さんの、ご健勝を祈るや切である。(T)